

## womanてらす



### 秋田八丈

八丈とはかつて着物の単位として使われていた言葉です。それが転じて絹織物のことを指すようになりました。八丈島の「黄八丈」が有名ですが、江戸時代には各地でさまざまな八丈が誕生。このうち、奥州伊達と上州桐生から技術を導入して生まれ

## 伝統に作り手が新風

たのが秋田八丈です。植物染料で染め上げ、基本は黄、鶯、黒の3色。鶯色は秋田独特の染料でハマナスを使います。

秋田八丈の作り手である奈良田登志子さんと知り合ったのは、もう20年も前のことです。当時は秋田市にあった滑川農吉さん(故人)の工房で働いていました。

この頃、私は滑川さんに作品を作ってもらいたくてお願いを続けていました。青森から何度通ったでしょうか。ようやく作っていただいたのは、鶯色のほぼ無地に近い美しい敵織たかひの着尺。ある女性誌でこのシックな着物を紹介したところ大きな反響がありました。全国から注文が寄せられ、滑川さんと喜び合ったことを今でもよく覚えてい

ます。滑川さんが亡くなった後、秋田の織物との縁がなくなるのかと思いましたが、2006年に奈良田さんが北秋田市に工房を開設。作品づくりをお願いしたところ、快く引き受けてくれました。

秋田八丈というと、大きな格子柄や縞柄が特徴ですが、奈良田さんは鮮やかな色合いに挑戦するなど、伝統に現代の感覚を吹き込んでいます。北東北の織物は珍しく、その一つである秋田八丈が受け継がれていくのはうれしいことです。

秋田八丈はマットな帯と合わせると、その艶やかさが引き立ちます。写真はいずれも奈良田さんの作品。各地から桜の便りが届く中、ピンクの秋田八丈には名物裂なものがれの毎錦まいにしんの帯をあしらっ



秋田八丈の着尺(いずれも奈良田登志子作)。帯は山形県の米沢織

てみました。

(田中陽子・「暮らしのクラフトゆずりは」店主)

〈第4金曜日掲載〉